不思議の森から Volume 42
THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM NEWS, Ochi April 2020

大タヲ山のアケボノツツジ

越知町南西端の稜線は「大タヲ山」と呼ばれ、小日浦地区にあって、東は佐川町と隣接し、南の眼下には旧葉山村、須崎市が広がり、遥か南には須崎湾・野見湾、そして太平洋を望むことのできる、大変眺望のいい場所である。

元より、小日浦は、断崖絶壁の岩場の洞窟に収まった、鳥取県三徳山三佛寺・投入堂〔平安時代：国宝〕に立地条件がよく似た聖神社（“土佐の投入堂”）で有名であるが、この上流の稜線近くの北斜面の岩場には、県内では珍しく標高1000mに満たない800mたらずの所に自生する、古木から成るアケボノツツジの群生地がある。地元小日浦出身の有志で結成した「聖の里小日浦を守る会」が眺望所や駐車場を整備し、便利さもあってか聖神社とともに多くの植物愛好家で毎年賑わっている。ただ、植物の開花時期は微妙な環境変化に左右されるため、なかなか開花の最盛期に巡り合うことは難しい。

大タヲ山では、アケボノツツジに混じって、珍しい黄色の花を付けるヒカゲツツジの他、牧野博士の発見・命名によるトサノミツバツツジ（『横倉山タイプ植物』）やオンツツジなどのツツジ類も多く見られる。また、平成28（2016）年の横倉山自然の森博物館友の会・フォレストクラブの「聖神社・アケボノツツジ観察会」では、越知町では初めての「タムシバ」（モクレン科）も確認されている（『不思議の森から Vol.35』）。写真中央のアケボノツツジの古木の奥にある、白い花を付けた低木も恐らくタムシバであろう。

ちなみに、大タヲ山のすぐ南の旧葉山村貝ノ川地区の石灰岩地域には、県内に三か所あるうちの一つである、やはり牧野博士の発見・命名のトサジョウロウホトトギス〔ユリ科・『横倉山タイプ植物』〕の自生地がある。

大タヲ山を含む小日浦は、越知町内では横倉山に次ぐ、大変見どころの多い地域である。

大タヲ山から見た野見湾（写真提供：岡村豊延氏）

越知町の蚕糸業

安井　敏夫

蚕糸資料館

かつて越知町が越知村と呼ばれていた明治の頃、近郷の４村の中の中心地として蚕糸業が盛んで、大正・昭和には蚕糸業の黄金時代を迎え、“高吾繭糸発祥の地”とされた。隣町佐川町が藩政時代から土佐藩筆頭家老・深尾家の城下町として栄えたのとは対照的に、越知町は明治期から商業の町として栄えた。尤も、越知町旧市街地の北東仁淀川沿いには、土佐と松山を結ぶ旧松山街道の渡し場（“下渡（しもわた）し”）があり、江戸時代から宿場町としても機能していたことになる。

さて、越知町内には「蚕糸資料館」と呼ばれる、かつて越知町の一大産業であった蚕糸業を紹介する施設がある。資料館には、四国有数の貴重な蚕糸業に関するまとまった資料が収蔵されているが、町内の小学校の総合学習で利用するくらい以外はそこを訪れる人はほとんどいなく、もっと広く町内外の多くの人々に観ていただきたいという一つのねらいもあって、昨年の夏休み企画展で『越知のおかいこさま　～昭和の越知を支えた養蚕業』を開催した。

そもそも養蚕の始まりは古代中国にあるといわれ、紀元前1000年頃には絹織物が“シルクロード”を通じて伝わり、６世紀頃には織物と共にトルコ、ギリシャを経てヨーロッパにまで広がった。日本は“シルクロード”の東端に当たり、養蚕技術は朝鮮半島を経て、１世紀頃（弥生時代中期）に大陸から帰化人によってもたらされたとされており、弥生～飛鳥時代の遺跡・古墳からすでに絹織物が出土している。

その後、日本固有の文化が花開いた平安時代には、天皇や貴族の豪華な衣装として絹織物が使用され、さらに室町時代になると、幕府と中国の明との間で勘合（かんごう）貿易が行われ、銅・硫黄・刀剣・扇などを輸出し、銅銭・生糸・絹織物などを輸入した。その背景には、室町時代にいろんな文化・芸道が生まれ、その一つに能が大成され、きらびやかな能衣装が織られたことによると考えられる。これに続く日本史上最も華やかな安土桃山時代もさることながら、天下泰平の江戸時代になっても、天皇家・大名家の豪華絢爛な衣装・能衣装として絹織物が依然もてはやされた。

明治時代になって、文明開化とともに着物の需要は減少傾向となるものの、まだまだ着物の時代は続き、西洋からの織物機械の導入により、機械化による大量生産の時代となり、製糸業は明治時代に著しい発展を遂げることになる。

高吾繭糸販売組合

越知町（旧越知村）の蚕糸業を担った製糸工場の沿革は、明治30（1897）年に「越知製糸㈱」として、蚕糸資料館西隣の現在の南四国部品㈱高知工場の敷地に創設したことに始まる。敷地面積は、南北約75㍍、東西約150㍍の11,250㎡（3409坪）で、４棟の工場建物で４ラインの機械が稼働していて、敷地南中央部に立っていたシンボルの31㍍の煙突が印象的であった。

その後大正13（1924）年に「片倉製糸工場」、昭和６（1931）年に「高吾繭糸販売購買組合」、昭和24（1949）年に「高吾繭糸農業協同組合」、さらに昭和48（1973）年には「高知県生糸農業組合」となる。中でも大正・昭和の最盛期には女工を含め200余名の従業員を抱えた越知町の一大産業で、年間45万キロの繭を加工し、生糸を出荷していたという。しかしながら、養蚕農家の高齢化や安価な外国産（中国）の生糸の輸入で生産価格が下がり、結果的に、昭和の終わりの昭和63（1988）年、高吾繭糸農業協同組合時代として操業58年、通算91年の製糸の歴史に幕を下ろすことになった。

ちなみに、越知町内では明治30（1897）年には、吾川郡横畠本村（現越知町）にも、女工30人、男工２人の従業員から成る小規模工場ではあったが、大原製糸工場が創立された。

そもそも、絹織物の原料である絹糸は、カイコガ科の蛾の幼虫が変態（完全変態）の段階で脱皮する際吐き出して作った繭（オスもメスも繭を作る）を構成する繭糸（生糸：精練していない）を原料とするが、江戸時代では一つの繭で約800㍍の生糸が取れたが、その後の蚕の品種改良などで1000㍍以上になった。ちなみに、800㍍というと、越知町に関して言えば、旧商店街の東から西までの距離にほぼ相当する驚異的な長さである。

では、蚕から生糸ができるまでの蚕糸業に伴う大まかな作業工程を簡単に追ってみることにする。

- 養蚕組合から各養蚕農家に毛蚕と呼ばれる孵化直後のカイコガ科の蛾の幼虫“カイコ”（体長３㍉ほどの大きさ）が配布される。
- 養蚕農家は、幼虫をえさとなる桑の葉を敷き詰めた飼育容器・蚕箔（“エビラ”）で飼育する。
  蚕箔は何枚も棚・蚕架にさしておく。桑の葉が少なくなったら足したり、蚕の糞を取り除いたりしてある程度成長するまでこの作業を繰り返す。
- 成長した蚕は体長約７㌢の“白いイモムシ”と呼ばれるもので、４回脱皮して５齢※幼虫（熟蚕）になる（６～８日）と桑を食べなくなる。続いて、体が黄金色に透き通るようになる頃繭を作り始めるので、繭を作らせるための蔟と呼ばれる体を支える糸を掛けやすいようにした器具（巣）に移す（この作業を上蔟という）。
  蔟には、紙製で蜂の巣状にしたものや、段ボール・わら・竹などで仕切ったものなど（回転まぶし・むかでまぶし・縄まぶし等々）さまざまなタイプのものがある。
- 蚕は蔟の仕切りの中で、先ず自分の体を支えるための足掛かりにする糸・毛羽（毳）を掛けてから生糸を吐き出して、身を守る（蛹になる）ための繭を作る（営繭）。蚕は２～３昼夜にわたって糸を吐き続け繭を作る。

  毛羽は生糸にはならないので、後に生糸を取り出す際毛羽取りで取り除く。
- 繭が完成すると、２～３日でその中で１回脱皮して蛹になる（化蛹）。
- 10～12日で蛹が脱皮して羽化し、繭を破って外に出てくるので、その前に蔟から繭を取り出し（収繭）熱湯で煮て蛹を殺す。
  蛹は繭の生糸を溶かすタンパク質で穴を開けて出てくるが、同時に尿（蛾尿）を出すため、そうなると糸が切れたり汚れたりして製品にならないので、頃を見計らって取り出す。
- 取り出した繭から不良品を選別（選繭）し、85℃の熱湯に漬け、稲の穂を束ねた小さな箒のような道具で繭の糸口を引き出す（繰糸）。
- 繭糸は数本合わせて繰解しながら集束（注文に応じて本数を変える）して１本の生糸にし、必要に応じて順次継ぎ足していき（接緒）、ドラム（小枠）に巻き取っていく。
  ふつう和服を扱う和装屋では、21、27、31デニールの絹糸を用いる。
- 絹糸の光沢を高め、かつ染色性を良くするために、糸の外側のセリシン（内側はヒブロイン）をアルカリ（例：炭酸カルシウム）で除去する。
- 仕上がった生糸を束ねて輪にして　ねじ造りした24束（綛）を１単位　（括）〔１括＝24綛〕として、商標マーク（例：越知町の場合はオナガドリ）を添付して出荷する。

蔟

《ヤママユガ（天蚕）》

生糸を採るカイコガ科の蛾の幼虫とは別に、「天蚕（“ヤママユ”）」と呼ばれるヤママユガ科の蛾で、日本原産の代表的な野蚕がある。幼虫は体長約８㌢、緑色で、ブナ科のクヌギやコナラなどの葉を食餌し、４回の脱皮を経て熟蚕となり、鮮やかな緑色の繭を作る。

繭一粒からとれる生糸の長さは600～700㍍で、1000粒で250～300㌘の絹糸が採取される。繭・繭糸は淡い緑色で高価であるが、繊維が太くて伸びやすく濡れると縮む、染色しぬぬくムラが生じるなどの欠点

がある。

次に、繭についてふれておくことにする。

◎生糸の生産

高知県では、南国市などでは１年に米が２回収穫される（二期作）が、生糸は“三期作”が可能である。気温が20℃以上ある５～10月の約２ヶ月に１回繭が取れる。高知県では、ふつう年２回、多くて３回であるが、信州・上州では年３回取れる。ちなみに、越知町では春・夏・秋の３回取れたようである。

春　：４、５月〔春蚕（“はるご”）〕
えさとなる桑の成育にもいい時期なので、繭の収穫量が多く、品質は最も良い。

夏　：７月〔夏蚕（“なつご”）〕
夏は気温が高く桑がよく育ち葉が厚く、蚕の成長も早いが、繭の収穫量は少なく品質も劣る（繭糸が太くて長い）。

初秋：９、10月〔初秋蚕（“あきご”）〕
まだ気温が高いため、繭の収穫量は夏蚕と同様に少なく、品質も良くない。初秋は朝方気温が下がるので、蚕室内を木炭の火で温めてやらなければならない。

◎繭の形

ひょうたん型：蚕の原種が作る繭で、小さく中央がくびれている。

楕円体：品種改良された明治時代以降の蚕の繭で、より大きい。

◎生糸の長さ

一匹の蚕が吐き出す精練していない糸を「生糸」といい、前述のように江戸時代のものでは一つの繭で約800㍍ある。その後蚕の品種改良が行われ、明治以降では1000㍍以上になったが、これは天然繊維の中では唯一の長繊維である。

◎生糸の太さ

人間の髪の毛の太さは、径0.07～0.1㍉（年齢とともに細くなる）で、平均0.08㍉（８μ）である。生糸の太さはさらに細かく0.02㍉（２μ）で、普通の計測器では計れないほどである 。

デニール計

そのため、生糸の場合、太さの代わりにある一定の長さの重さをもって基準としている。それが「デニール（ｄ）」という単位である。生糸を検尺器で450㍍計ってとり、それを巻いて束にしてデニール計で重さを計る。0.05㌘であれば１デニール、0.1㌘であれば２デニールということになり、これは１円玉の10分の１である。長さが同じなので、重さの違いは生糸の太さの違いを表すことになる。

◎絹織物（反物）

着物（和服）１着分を作るのに必要な円筒状に巻いた布地を「１反」といい、巾：36㌢×長さ：12㍍で、約700㌘ある。これができるまでには、繭が約2600粒（約4.9㌔）も必要である。生糸が工場から出荷される時の１綛を24輪束にした１括から着物４着分ほどがとれることになる。

絹織物は、肌触りが良く、軽くて丈夫で保温性がある（暖かい）。絹の成分は、繊維状タンパク質・フィブロインで、ウールがタンパク質の一種であるケラチンで虫に喰われやすいのと違って、喰われにくい。染色・柄を施し、また織り方によって優美かつ豪華絢爛（特に結婚衣装・能衣装など）となり、日本が世界に誇るべき芸術性の高い伝統工芸品であり、“文化”である。ただ、非常に高価であるのと、雨に濡れたり、汗・しみなどに対する洗濯・染み抜きなどの手入れ自体も高額で出費が嵩むなど維持するのが大変であるという欠点もある。

生糸出荷商品

越知町の蚕糸業の歴史の中で、昭和24（1949）年に設立した高吾繭糸農業協同組合の時代にはアメリカ・フランス向けにも出荷しており、一大発展期にあった。また昭和30年代には、越知町内の峰興寺（“文殊様”）の境内に、養蚕農家の守護と産業の発展を祈念して、全国的にも珍しく県内唯一の馬鳴大菩薩を祀る馬鳴堂が同組合によって建立された。しかしながら、時代の波には勝てず、昭和49（1974）年を境に、養蚕農家の高齢化や外国産の安い生糸の輸入で価格が下がり、繭の生産は年ごとに大幅に減少し、遂に、次の高知県生糸農業組合となった昭和末期の昭和63（1988）年２月に操業停止となり、60年近い歴史に幕を閉じた。

この60年に近い組合製糸の歴史の実証を深く刻み、後世に継承すべく、四国有数の充実した内容の蚕糸資料を展示・保管する記念施設「蚕糸資料館」を建設し、越知町に移管され、かつての町の一大産業であった証として地元越知町の小学校の地域学習に活用されている。資料館正面入り口上に掲げられている「オナガドリ（尾長鶏）」のレリーフは、高吾繭糸（昭和）40～47年）及び

掛軸

高知県生糸（昭和48～62年）で使用された生糸商標に基づくものである。

越知町の蚕糸業の発展ぶりを示すものとして、蚕糸資料館の３階に、100年以上も前の明治30年に毛筆で書かれた墨書の大変珍しい掛軸がある。

Industry is the
Source of national power
For Ochi Seishi Kwaisha
Kochi, July 20th 1900　　Henry Satoh※

（和訳）産業は国力の本源である。越知製糸会社さんへ。
高知、1900年７月20日　　ヘンリー・サトウ

右上隅には「**工藝者國力之本源也**」－工芸（製糸業のこと？）は国力の本源なり－と、同じ意味の漢書が記されており、英語で書いてもらったサインに、その和訳を付記したものと思われる。ここで、ヘンリー・サトウとは、旧幕臣で英学者・歴史家・国際ジャーナリストであった佐藤顕理（けんり）が、ペンネームに「Henry Satoh」を使っており、彼を指すものと思われる（日米学院院長・故 永国淳哉氏による）。

当時、恐らく西日本最大の規模を誇った「越知製糸会社」（明治33年設立：百釜百五十人操（あやつ）り）を視察に来た要人（明治政府？）が、その規模・生産の大きさに感銘を受け、記念に墨書をしたためたのではないだろうか。それほど、越知の製糸業は、この地域の花形産業であったことが伺われる。

現在、愛媛県西予市野村町にある「西予市野村シルク博物館」内で、西日本では唯一桑の栽培を含め蚕糸が行われており、「伊予生糸（いよいと）」の銘柄で生産・出荷されている。今はなきかつての越知町の重要な産業であった製糸業、その歴史とそれを語る貴重な資料を地元住民はもちろん多くの人々にもっと広く知ってもらい、後世に継承していって欲しいものである。

※脱皮の前しばらくの間えさを食べない静止状態があり、これを「眠（みん）」と呼ぶが、「眠」と「眠」との間を「齢（れい）」という

（やすい としお／横倉山自然の森博物館 学芸員）

博物館行事

秋季企画展：『懐かしい昭和のレトロ展 Part Ⅲ』
2019（令和元）年９月28日（土）～12月１日（日）

20世紀の大半を占める長かった昭和時代が終わり、平成を経て新たな時代「令和」がスタートし、益々“昭和も遠くなりにけり”という感がするようになった。明治～昭和初期に生まれた多くの人々にとっては、忘れられない悲惨な戦争・敗戦を経験したが、それに屈することなくその苦境を乗り越え、国民が一丸となって復興に勤しみ、結果高度経済成長を遂げ、みごと経済大国の仲間入りを果たすまでに至った。そのような“激動の昭和”を経験した人々にとっては、苦しくとも懐かしい数々の思い出があったに違いない。東京オリンピック、新幹線の開通、大阪万博、テレビ・洗濯機・冷蔵庫という“三種の神器”の開発、漫画、アニメ、ゲームの登場等々、昭和に生まれ流行したものは数知れず、人々の生活水準は昭和時代に一気に飛躍的に上昇した。このような衣食住、乗り物、娯楽などあらゆる分野で発展・多様化した「昭和」という時代は、今後も“懐かしの昭和”として昭和世代の人々の心に深く刻まれ、いつまでも語り継がれていくことであろう。

今回、この敗戦後の貧困から脱し経済の成長期にあって、決して裕福とはいえないまでも、国民に夢と希望があり、何かしらほのぼのとした懐かしさを感じる「昭和」に焦点を当てた標記企画展を開催することにした。

多くの人々に当時の出来事や思い出、懐かしさを、また当時と共通する何かを現代人にも感じ取ってもらうべく、大規模ではないが、乗り物（バイク、自転車）・電化製品・生活用品・映画ポスター・雑誌・レコード・遊具等々、さらには、昭和時代にはまだたくさん生息していたがその後

急激に個体数の減ったニホンカワウソ、ツキノワグマなど、当時の懐かしい資料を展示し、来館者に往時を追懐して戴くことができればと願う。

――――《関連イベント》――――

●ポン菓子……10月13日（日）
●かき氷……10月14日（月・祝）
●紙芝居／民話…10月14日（月・祝）
（協力：高知県立文学館・土佐民話の会）

主な感想としては、「なつかしい」「楽しかった」が圧倒的に多かった。その他には、「古き良き時代。あの頃にもどりたい。」「私たちの青春時代、良い時代でした。なつかしく一時タイムスリップできました。」「昔の子供の頃が思い出され、なつかしく嬉しかった。」「なつかしの昭和。大変感動致しました。」「一番変化のあった時代ではないかと感じました。」「昔なつかしい物が沢山あり、うれしく拝見させてもらいました。よくこんなに集めたなと思いました。」などがあり、懐かしの昭和時代を十分堪能して戴いたようだ。

企画展：
『よコジローとわたしたちの一年間
～ 越知小 学びの夢気球 ～』
2020年12月21日（土）～２月２日（日）

越知小学校１年生から６年生までの「生活・総合的な学習」の学びを中心に、越知小学校の取り組みを、大空をゆったりと進む気球のように伝える企画展。１年生：芋ほり体験、２年生：トウモロコシの皮はぎ体験、３年生：岡林農園の見学、４年生：仁淀川探検、５年生：北海道滝上町との交流、６年生：横倉山登山を、解説パネルと写真を使って紹介。

１年生は「自動車ずかん」「海のかくれんぼカード」、２年生は「あいうえお作文」、イルスト、色紙を貼った「ぼうし」、４年生の発表は「ゴミの学習から」「水の学習から」、５年生は「社会見学新聞」「学級新聞」、６年生は『化石新聞』『横倉山 植物・花新聞』による「横倉山ＰＲ」などのまとめが発表されていた。

１月31日（金）には、１年生と３年生による活動説明会が行われ、１年生は「動物の赤ちゃん」についての発表で、最初24名の生徒が４班に分かれてグループ発表を、続いて各自がお客さん一人一人にマンツーマンで発表を行った。１年生とは思えないような、いろんな動物の赤ちゃんについて、その成長・生態をイラスト入りでよくまとめられていた。発表前は不安だったようであるが、越知町の“ゆるキャラ”の「よコジロー」が応援に来てくれたこともあって、みんな大変元気に発表できていた。３年生は「地域に『笑い』を届けよう！」ということで、34名の生徒が一人ずつハッピを着て小話を披露して笑いで会場を盛り上げた。

友の会だより

「淡路・和歌山」視察研修〔一泊二日〕
2019年10月19日（土）～20日（日）

本福寺蓮池

初日の見学地である、淡路島にある本福寺水御堂（みずみどう）は、世界的建築家・安藤忠雄による設計で、蓮池の下に本堂があるという極めて珍しい構造である。しかしながら、建設４年後の平成７（1995）年に発生した阪神・淡路大震災の際にも、震源が近かったにも拘わらずビクともしなかったといい、安藤建築は地震にも強いという証なのであろうか。

続いて、和歌山県立自然博物館に行き、横倉山で牧野富太郎博士が発見･命名した「トサジョウロウホトトギス」(ユリ科：『横倉山タイプ植物』）の近縁種である「キイジョウロウホトトギス」の花（鉢植え）を見せてもらい、レクチャールームでその自生地や分布、環境等について講義を受ける。環境はトサジョウロウホトトギスの方が極めて厳しい場所にあり、数も少ないが、キイジョウロウホトトギスは岩場ではあるが、観察しやすい場所にあり、群生する場所もある。両者の違いは、前者は葉の基部が円形で時に有柄であるのに対し、後者では心臓形で茎を抱くことである。また、前者では花弁の裏側の先端まで斑点があるが、後者では途中までしかない。さらに、自生地の地質に関しては、前者が秩父累帯中～南帯の石灰岩地に限られるが、後者で

キイジョウロウホトトギス

はその南側の四万十帯中の火成岩もしくは火山砕屑岩と堆積岩との境界部に生じた岩壁によく見られるという、双方の特異性がある。

二日目は、真言宗の総本山で真言密教の聖地である世界遺産・高野山を訪れる。高野山内の117もの寺院に1200年来伝わる国宝～重文クラスの仏像その他の法具類を収蔵・保管する「高野山霊宝館」を見学した後、弘法大師が眠る奥之院に参り、大師の墓前で各々祈りを捧げた。奥之院に至る道中は、この世とは思えないような異空間・異次元の世界で、自然と心が洗われるような心地がする。

「越知の野鳥観察会（冬編）」

2020年１月11日（土）〔指導：谷地森秀二 横倉山自然の森博物館学芸員〕

最初に図書室で四国･高知県の鳥､鳥の種類(「渡り区分」)について簡単に学習した。高知県は四国では森林面積が最も広く、従って鳥の種類も多い。また、長い海岸線、二つの大河があるため渡り鳥､特に水鳥が多いようだ。この後、博物館裏の駐車場、仁淀川沿いの宮ノ前公園で望遠鏡を使って探鳥を行った。短い時間ではあったが、快晴の下“水辺の宝石”と呼ばれるカワセミの他、アオサギ･キジバト･セグロセキレイ・ジョウビタキなど約10種類の鳥類が確認された。

《追記》

「フォレストクラブ研修」

2019年５月26日、横倉山自然の森博物館の友の会会員一行は香川県に行きました。今回の目的は香川県の情報通信交流館で行われる大阪自然史博物館からいらした西澤真樹子さんの講演会『ＮＰＯ法人みんなでつくる自然史博物館･香川　記念講演会「自然史博物館は何を生み出せる？」』を聴くこと、香川県立ミュージアムで催されていた特別展『高松松平家博物図録　江戸の超グラフィック　自然に挑む』の見学です。

まず西澤さんの講演会を聴きました。この講演会は前半と後半の二部構成で、内容としては、まず西澤さん自身の生い立ち及び博物館との歩みが述べられ、大阪自然史博物館の歴史そして現状及びこれからの話と多岐にわたる博物館活動の報告など聴きごたえたっぷり盛りだくさんの２時間でした。

講演会会場にはさすがは「なにわホネホネ団」団長、さまざまな動物の頭蓋骨が並べられており、参加者は写真を撮ったり実際に骨に触れたりすることができるようになっていました。ステキな大阪自然史博物館のいきものグッズの販売も会場で行われており、西澤さんご自身で売り子をされていたのが印象的でした。

その後、我々は西澤さんと共に香川県立ミュージアムの特別展を見学しました。特別展名に「超」とつくだけあり、博物図録に描かれた生物描写の精巧さに参加者は感嘆するばかりでした。図録本体の展示はもちろん、８Ｋの解像度の映像で展示品を紹介するといった展示もあり興味深かったです。　（そめや　ふく／友の会会員）

「天忠寺跡石垣前草刈り」

2020年２月26日（水）〔参加者：友の会・越知平家会　計３名〕

越知町柴尾（しばお）に、京都・龍安寺（世界文化遺産）の初代住職･義天玄詔（ぎてんげんしょう）が若い頃修行し得度した天忠寺跡がある（『不思議の森から Vol.37』）。現在そこの字（あざ）「東門」と呼ばれる寺の正門に当たる石垣（長さ約33㍍）と思われるものが残っており、今回その全貌を把握するために、所有者の承諾を得て有志で石垣前の煤竹（すすだけ）を刈った。石垣は野面積で、石材はほとんどすべてが地元柴尾に産する“田鶴石（たづいし）”と呼ばれる砂岩〔中生代白亜紀〕であるが、何故か１個だけ仁淀川の河原から持ってきたと思われる４億年前の花崗岩（三滝花崗岩）が使用されている。

後日、専門家（高知県埋蔵文化財センター、土佐史談会会長、越知町文化財保護審議委員）に観てもらい『当時の石垣の可能性があるが、学術調査が望まれる』という意見を得た。

■横倉山自然の森博物館ニュース　第42号　令和2年4月1日発行

横倉山ミニ歳時記

■ミドリワラビ　*Deparia viridifrons* (Makino) M.Kato

牧野博士が横倉山で発見・命名した『横倉山タイプ植物』の一つ「ミドリワラビ」が、昨年高知県立牧野植物園の職員によって20数年振りに確認された。これまで長い間見つかっていなかったので、横倉山では絶滅したものと考えられていたが、「空池（からいけ）」周辺でわずかに自生していることがわかった。

「ミドリワラビ」は、現在はメシダ科に分類され、牧野博士が明治20（1887）年に横倉山で採集したものを元に、明治25（1892）年に新種として発表したものである。高知県では石灰岩地に多く見られ、横倉山においても同様である。

主な特徴は、葉軸（中軸）に沿って両側に翼（よく）があり、葉軸と羽軸が分岐する（羽軸の付け根）に突起があることで、横倉山では胞子ができるものとできないものとがある。

〔博物館日誌（抄）・令和２年度博物館行事予定〕

《企画展》

●令和元年９月28日(土)～12月１日(日)
　秋季企画展：『懐かしい昭和のレトロ展 PartⅢ』
●12月21日(土)～令和２年２月２日(日)
　学習発表会：
　『よコジローとわたしたちの一年間
　～越知小 学びの夢気球～』
○２月22日(土)～４月５日(日)
　企画展：『きかくてん展』
○４月25日(土)～５月31日(日)
　春の企画展：国立科学博物館巡回展
　『日本の生物多様性とその保全』
○６月13日(土)～６月28日(日)
　第42回高知県写真家協会展「土佐」選抜移動展
○７月18日(土)～９月６日(日)
　夏休み企画展：『見る 観る みる展』
○９月26日(土)～12月６日(日)
　秋の企画展：
　『理系女展～自然史科学の世界に魅入られた女性たち～』
○12月19日(土)～令和３年１月31日(日)
　冬の企画展：『越知小・中学校総合学習発表会』
○令和３年２月27日(土)～３月28日(日)
　企画展：『新着資料展～2020年度受け入れ標本の紹介～』

《自然観察会》

○４月19日(日)　横倉山の生きもの調べ（巣箱と自動撮影）
○５月17日(日)　〃　（カエル）
○６月21日(日)　〃　（夏の鳥たち）
○７月19日(日)　〃　（灯に集まる虫）
○８月16日(日)　〃　（土の中の虫たち）
○９月20日(日)　〃　（水の生きもの）
○10月18日(日)　〃　（横倉山の樹木）
○11月15日(日)　〃　（巣箱を使う動物）
○12月20日(日)　〃　（自動撮影）

令和３年
○１月17日(日)　横倉山の生きもの調べ（冬の鳥たち）
○２月21日(日)　〃　（シカの様子）
○３月21日(日)　〃　（水生昆虫）

《講座・イベント》

○４月12日(日)　博物館教室「横倉山と修験道」
○４月18日(土)　〃　「横倉山の動物」
○５月10日(日)　〃　「横倉山のカエル」
○７月26日(日)　〃　「標本をさわって“みよう”」
○８月１日(土)　夏休み博物館教室「まが玉づくり」
○８月15日(土)　博物館教室「顕微鏡でのぞいて“みよう”」
○８月16日(日)　夏休み博物館教室「万華鏡づくり」
○10月４日(日)　博物館教室「交流会：理系女VS女子中高生」
○10月11日(土)　コンサート「いのりのおとし（仮）」
「標本作製・整理おひろめ会」
　４月26日(日)・５月31日(日)・６月28日(日)・７月26日(日)
　８月８日(土)・９月27日(日)・10月25日(日)・11月29日(日)
　12月27日(日)
　令和３年１月31日(日)・２月28日(日)・３月28日(日)

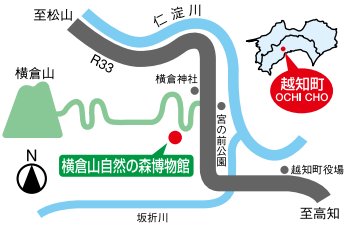
〔博物館友の会「フォレストクラブ」・令和２年度活動予定〕

○令和２年４月11日(土)　聖神社見学とアケボノツツジ観察会
○５月24日(日)　よその博物館見学「面河山岳博物館」
○６月６日(土)　仁淀川水質調査
○６月30日(火)　ヒメボタル観察会
○７月25日(土)　ナイトミュージアム
○８月19日(水)　おちぞら★夏の星空観察会
○９月13日(日)　よその博物館見学「牧野植物園」
○10月８日(木)　おちぞら☆秋の星空さんぽ
○10月　視察研修〔一泊二日〕：
　「比叡山延暦寺・寂光院・岐阜城を訪ねて」
○令和３年１月１日(金)　2021年の初日の出を横倉山で
○１月13日(水)　おちぞら★冬の星空観察会
○３月２日(火)　おちぞら☆横倉山で星空さんぽ

高知県越知町立
横倉山自然の森博物館
THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM, Ochi
〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060　FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.lg.jp/

●開館時間：午前9時より午後5時まで
　最終入館は午後4時30分
●休 館 日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
　12月29日から翌年の1月3日まで
●入 館 料：大人……500円
　高校・大学生……400円
　小・中学生……200円
（※各20名以上の団体は100円引き。）

●越知への交通
高知 ―JR特急 約30分／JR普通 約50分― 佐川 ―バス 約15分― 越知



地球環境にやさしい
再生紙と大豆油インキを使用しています。